

災害跡を訪ねて - 江津市桜江町川戸 -

加藤 芳郎

江の川は広島県北部にその源を持ち、中国山地を穿入蛇行しながら江津市で日本海に注ぐ。その流域面積は3,900km²と中国地方最大をなし、源流の一部は島根県奥出雲町三井野にあって、「なぜここに？」といぶかしむ。

江の川の水害は、明治26年10月、昭和18年9月、同20年9月、同40年6月、同47年7月、同58年7月、平成18年7月・9月などが代表といわれる。中でも昭和47年7月の災害は史上最悪の大水害であり、県境付近での総雨量は600ミリ以上におよび、沿岸地域のほとんどが水没した。写真はJR三江線川戸駅と桜江支所に掲示されているそのときの浸水深を示す看板である。川戸駅の看板には「S47年7月12日洪水のあと」と記されている。身長162cmの私には見上げる高さにそれはあり、そこにあると知っている人に教えていただいて初めて確認できた。高さといい、庇の陰といい、分かりにくい位置にある。

昭和47年のこのとき私は何をしていたか。「そうだ、宮城県白石市に出張して...、初めての上野駅で特急に乗り遅れて...」と社会人として初めての現場出張だったので覚えているが、他の細かいことは忘れてしまった。災害発生から41年経ち、人々の記憶が消えつつあるとともに、災害のことを知らない人が増えている。このことを残し、どのように後世に伝えていくか、この瞬間を生きた人々の体験は貴重な財産であり、散逸しないように適切に管理し、そして公開を継続して行くことが重要であろう。西教寺では小学生を対象に開催された写真展のパネルが展示してあり、我々も見せていただいた。当時を物語る多くの貴重な写真が数多く残されており、災害の規模にただただ驚くばかりであった。

私の住む益田は昭和58年に大災害を被っている。平成18年に益田川ダムができ、街中を流れる益田川の整備も終了したことによって、今後、洪水被害はまず起きないといわれている。しかし、「これまでに経験したことのない...」が最近はありふれており、益田がまたいつ同じ目に、と思うこともある。ハード対策が万全ではないことはあまたの災害が物語っており、我々にとっては残し伝えられた記憶や記録から災害に対応する術を学ぶことが、被害軽減の第一歩だとあらためて思うところである。



左写真は川戸駅、右は桜江支所における洪水水位の看板。支所では上の看板が浸水高さを示す。下の看板は目につく高さであり、頭上に表示があることの説明板である。